

劇あそびの実践可能性と課題 —幼稚園訪問記—

鍋 島 幹 夫

1 はじめに

数十年も前のことだが、小学校1年生を担当していたときのこと。休み時間になると、子どもたちが、男の子も女の子も何か口々に言い合っている。注意して聞いていると、ブランコにのるとき、何になってのるか、その役を奪い合っている言い争いだった。子どもたちは、ウルトラマンになってのりたかったのだ。やがて、役が回ってくる順番が決まったらしく、いさんで外に出ていった。この時、子どもというものがどのようなものか改めて教わったように思った。

またある日、算数の授業で「0」の授業をしていたときのこと。机の上に置いたおはじきを一つつなくしていき、1個もなくなったとき、これを「0」ということを教えようとした。「ないね」というと、子どもたちは、「ある」という。とまどう教師におかまいなく、「何にもないのに、いい香り」と歌い始めた。文学的な答えだ、と苦笑しながらも驚きをもって感心した。この時もまた、子どもの感じ方考え方、そして指導のあり方について考えさせられた。

2 幼稚園・保育園教育の一断面

さて、昨今、「小1プロブレム」などと言われ、小学1年生で授業が成り立たなくなるような事態が起きることもあると言われている。子どもたちが変わったとも、すでに幼稚園や保育園で経験していて、ことさら興味が持てないからとも言われる。幼稚園・保育園、小学校、中学校がそれぞれ連携して指導に当たることについては、かねてからその必要が叫ばれ、現に、小中の連携指導については、さまざまな工夫による実践がなされている。しかし、幼稚園・保育園と小学校の連携については、入学前、新入児について、個々の児童についての情報交換や、生活科の学習での相互交流程度にとどまっているというのが現状である。互いの教育の目標、指導方針等についてまでも話し合い、園での子どもたちの活動の様子などを通して実情や実態を知る機会はあまりないといえる。

運動会やお遊戯会と称する発表会には、子どもたちが入学してくる幼稚園や保育園から案内があり、出かける。そこで見る子どもたちの「成果」は、かなり高度なもので、驚かされることがある。そろいのユニホームを着た鼓笛隊が、むずかしい曲を演奏してみせてくれる。お遊戯会では、おとぎ話の王子様か女王様が見まがうような衣装を着た子どもたちが、勇壮に、あるいは迷いつつ動き舞う。観客前にはビデオカメラが居並び、いっせいにカメラの閃光が光る。まるで、着せ替え人形か愛玩物のように見える子どもの扱い方に仰天したのは、初めてお遊戯会なるものに出かけた時のことで、親の真剣さに気圧されたかたちの現在である。

園側も、親に教育効果を見てもらうため、大なり小なり、いきおいこういうかたちになるのであろうが、発表会のための選択・設定という観を否めない。どの園の現状もこうだとは思わないし、もちろん、これが指導のすべてとも思わない。しかし、子どもに対する親の接し方をみると、この延長に「小1プロブレム」があることは否定できないように思える面もある。

ところで、本校へは、一つの幼稚園と一つの保育園から新入生が入ってくる。人口3500人の地域に、2つの保育園と1つの幼稚園がある。園児数はそれぞれ年々減少している。

本校の近くにあるS幼稚園には、2・3年前から折りにふれ訪問している。幼・小の連携の観点から、現在の幼児がどのようなものかを知るためである。今回、断続的にはあるが、4・5回訪問した。特に意識して見たことは、「表現—感性と表現に関する領域」についてである。

3 S幼稚園のごっこあそび・劇あそび

本幼稚園はお寺の経営によるもので、創立37年。三方を山に囲まれた静かな環境の中にある、全幼児が16名の小さな幼稚園。年齢構成は、5歳が5名、4歳が6名、3歳が5名である。本園は、一人ひとりの子の良さや持ち味を大切に、情操面の指導に力を入れている。

この幼稚園に、来園の目的と指導の実践を申し入れたところ、園は、幼・小の連携の意味からも意義あることと快く受け入れてくれた。特に、ごっこ遊びや劇遊びを、子どもが学校で学習する上での重要な要素であるととらえ、その視点での観察と指導の試みをさせてほしいというこちらの意図を述べた。

ごっこ遊びや劇遊びは、子どものイメージづくり、自己の問題や課題の把握のし方、その解決のための行動や態度といった点から重要になると考えたからである。以下、自由時間でのごっこ遊びの観察と劇ごっこの実践について、その実際と考察を述べる。

(1) 始業前の自由遊び

園児たちは、朝園にくると、よく運動場の砂場で砂遊びをするという。訪ねた日は、10月の半ば。8時30分ごろから三三五五登園し、砂場に集まってくる。二三人で深く穴を掘り、トンネルだ、ダムだといっている組もあれば、各自に、プラスチック製の型押しに砂を詰め、機関車やバスなどの乗り物を作っている子もいる。手で丸めた団子をおもちゃの皿に並べている子もいる。

珍しい客に、子どもたちは、元気よくあいさつをしてきた。興味を持ったのか、すぐに近寄ってくる。名前を聞くとさまざまな返し方で答える。肩に手を置いてこちらの顔をのぞき込んでくる子、自分のことをあれこれ話す子、作った団子を差し出してくる子など対応はそれぞれである。「だっこ」をねだる子もいる。

子どもたちの様子を見てみると、組になって作っている子も一人で作っている子も一様に自分の個々の作業に没頭していることがわかる。組の子のうち、一人が何やら声をあげると、他の子は穴から顔をあげ一瞬いっしょに笑顔になるが、すぐに自分の作業にもどる。団子を作っている子は、場所を一つにしてかたまっているものの、完全に個別な作業であるかに見える。しかし、砂場には、穏やかで安心感に満ちた、不思議な時間が流れていることに気付く。

ごっこ遊びの中の子どもたちの様子を見てみると、本来こうした活動を指導として扱う場合に意図的にねらう、協調性や、社会性、あるいは運動能力などよりも子どもの充足感をまず第一に考えることがいかに大切かということが分かる。まして、始業前のこと。一日への落ち着いた構えづくりや意欲づけとして、かたちこそ違え、小学校でも取り入れたい要素と考える。

いうまでもなく、表現活動はもともと自発的な活動である。幼児の場合、表現というよりも表出であることを考える場合、今回の幼稚園教育要領の改訂で、前要領にあった「絵画制作」と「音楽リズム」がなくなり、劇的活動を加えて、「表現」となったことは特に重要視されなければならない。要するに、子どもの未分化でもっとめちゃくちゃな要素を大切にしようとするこの改訂の趣旨は、子どもの発達を考えると、指導援助のあり方に再考を促すにちがいない。ときに指導者側の要求に沿ったパターン化した絵画や音楽の「成果」をみると、子どもたちの個々の衝動や欲求はどのように処理されたのだろうかと思わざるをえない。

(2) 劇あそびの実践

子どもたちの始業前の様子を見た後、担任との打ち合わせをした。幼稚園での指導はまったく初めての者として、しかも前後の指導の関連もなく、飛び入りで受け持たせてもらう立場である。現場の先生のいうことを聞かなければならない気持ちが先に立つ。しかし、ただ、子どもたちの劇あそびの実践が知りたい、自然な反応が見たいというこちらの意図を伝えた。

始業前の様子からばかりでなく、以前からの観察でも本園の子どもたちは互いに仲が良いことは確認済みである。状況を設定しそこで遊ぶことにしたらどうだろうということで、日を改めて伺うことにした。

電話でさらに打ち合わせを行う。「動物になって森へ行こう」という設定で遊ばせることにしたいというと、担任の提案で、異年齢がいいだろうということになった。1週間後、縄状のひもと新聞紙を持って行った。

○「動物になって森へ行こう」の取り組み

園につくと、子どもたちは歌を歌っているところだった。8名の園児が元気に歌っている。歌が終わってあいさつ。担任に、この状況で「子どもたちがどう出るか」が見たい旨を伝え、確認する。次の順序で活動を進めた。

- ① 何になるかを決める。
- ② 森へ行く
- ③ 道に落ちていたもの（ひも、新聞紙）に出会っての反応と遊び。

○ 活動の実際

- ① 何になるかを決める。

いきなり、打ち合わせの不十分さ、指導者の意図の説明の不十分さを後悔することから始まった。担任の机の前に画用紙、はさみ、のりなどが準備されている。動物になるということは、紙の輪に耳を付けることだったのである。

部屋のものを使って何かになることを目論んでいたのだが、妥協しつつ、担任の作る輪に子ども自身が作った耳を付け終わるのを待つことにする。こちらもきつねになることにする。やがて、とら（2名）、くま（1）、きつね（1）、ハムスター（1）うさぎ（3）りす（担任）がそろそろ。

② 森へ行く

体の大きな子が先頭に立って歩き始めた。誰も文句を言わず従う。部屋の戸を開け、廊下に出た。後ろの戸を開け部屋の中に戻る。隣の部屋との仕切りのカーテンドアから向こうをのぞいている。「何が見える」ときくと、くすくす笑っている子もいるが、「海」「飛行機」「電車」という答えが返ってくる。「森に着いたら教えて」というが、なかなか着かない。部屋の中をぐるぐる、机を回ったり、やたらともの隙間を通って行く。「まだかな?」「まだー」と、「ついた!」とくまになった子。すると「ついた、ついた」の連呼がはじまる。

③ 道に落ちていたものと出会っての反応と遊び

ひもを差し、「何か落ちている」とこちらが叫ぶと、全員が突進し、すぐに綱引きが始まった。それはそれは、もの凄い勢いで引っ張り合う。無言のままただ引き合っている。あつちに倒れこちに倒れながら、うんうん唸っている。

すると、とらになった年長の子がひもの端を回し始めた。しかし、もう片方を回すものがない。ただのひもの奪い合いにしか映らない。気おされてしまい、とっさに新聞紙を指差した。いっせいにひもを投げ出し新聞紙に突進する。一枚一枚を手にとって散らばる。一人が上下に振る。次々にまねをする子。端を持って走り出す子。部屋中が白く波立ったように見えた。その中で、丸めた新聞紙を蹴り始める子も出だした。「かみひこうき、かみひこうき」といいながら新聞紙を担任に持って行く子がいる。担任が折り始めると、いっしょに折りだした。新聞紙一枚を使った大きな飛行機。

中には新聞紙を引き裂く子がいる。あちこちで細く裂きはじめる。さらに千切って放り投げ、笑いながら「雪」という。「雪」、「雪」あちこちから声があがった。千切った紙に息を吹きかけ飛ばす子もいる。舞う雪を下から両手であおっている子たちもいる。雪が舞う中を大きな飛行機が飛ぶ。

頃を見計らって、そろそろ「帰ろうか」と声をかけると、いっせいに机の陰に引っ込んだ。「家に帰ったの」と聞くと、しゃがみこんでニコニコしている。どうやら帰ったらしい。部屋の中央を見ると、うさぎになった一人が残って、散らばった紙を拾っている。「えらいね。片づけをしているね」というと、他の子も集まってきた片づけを始めた。

以上が、「動物になって森へ行こう」の概略である。あえて目標は立てず、状況だけを設定するだけで、子どもたちの出方や反応を見て、その状況や子どもの個々に応じて支援することを考えた。

4 考察

以下、実践の成果と課題について述べたい。

(1) 成果

- ① 動物になって劇あそびをすることで、子どもたちは遊びにすすんで参加し、活動には意欲的に取り組み、積極的であった。

- ② 指示を少なくし、子どもたちが感じていることを受け止め個々に言葉かけをすることで、子どもたちは自発的にイメージを楽しむことができた。
- ③ 活動の場を、教室を中心にしながらも柔軟な想定をすることで、森を子どもなりに想定することができ、からだ全体を使って表現することができた。

(2) 課題

- ① 動物になるとき、その時々の子どもの自由な「なりきり」を重視すべきで、習慣化、固定化からの脱却を図る必要がある。
- ② ひもから新聞紙へ教師が意図的に変えたが、綱引きから、なわとび、さらに…など、もっと子ども一人ひとりの欲求を一つずつ解消することを心がけるとともに、葛藤の場面を大切にし、自分たちで解決させる必要がある。
- ③ 表現の客観化を考えると、一回でいくつもの状況を設定するよりも、「もっとおもしろく」という観点から、2度3度再挑戦することを重視すべきである。

以上、環境の設定、教師の支援、保育としての教師のかかわりを意識した点から考察を述べた。まとめていえば、表現をもっと保育全体に関わる問題としてとらえ直す必要があるということである。表現は、子どもにとって充足であり、自分をより確かなものにするための行為である。これは大人にとっても同様であるが、特に幼児期の子どもにとって、この人間的な行為の持つ意味は大きい。

そのために、大人の考える既成の方法や技能を教え込むことよりも、刺激に対する反応に多様性がある子どもが、発達や個に応じて表現しようとする意欲・態度や充足感といった個別的な支援の問題を大切にしながら、表現の質や技能そして友達との関係づくりとともに、表現の順序性(役・ストーリーづくり・約束など)を子どもや集団の気持ちや実態を考慮に段階的に援助していくことが大切である。

5 おわりに

子どもというものは、新聞紙一枚でも自由に想像を楽しむことのできるイメージの住人であるとともに、自分自身のからだの動きにさえ関心を持ち、それを楽しみに変えることのできる身体的な存在でもある。このイメージの柔軟さと身体性の面から子どもをとらえるとき、劇遊びは、豊かな心の育成と自分で考え工夫する問題解決力の育成、友だちとの関係づくりといった面から大きな可能性をもっている。子どもを出発点に、個々の子どもの充足感を考慮しながら、段階的な援助の工夫を通して、劇遊びをさらに有効なものにしていくことが大切である。

このことを幼稚園と小学校がともに認識し、幼・小教育のつながりの指導をともに考えていくことが、指導のギャップが一因とも考えられる「小1プロブレム」の解消ばかりではなく、小学校教育が目標とする、豊かな心と確かな学力の育成をより可能にし、将来の人格形成につながる重要な要素であると考えられる。

最後に、この研究実践のために便宜を図っていただいた「ひぜん幼稚園」の中川けい子園長に

は、深く感謝申し上げます。